



産む・産まない・産めない 女性のからだと生きかた読本

評者・松岡 恵 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科リプロダクティブヘルス看護学分野教授

「少子化」が社会の関心事となつて久しい。現在「少子化問題」は、「女性が子どもを産まなくなった」ことが原因である、という意識が定着している。そのためマスコミなどでは、女性の生き方や価値観にからめた「女性の産む、産まない」が論じられている。

この本は、そのようなジャーナリスティックな書籍とは、一線を画したものである。少々乱暴な言い方をすれば、この本は、「産む・産まない・産めない」にかかわる健康問題に直面した、個人や家族と向き合う臨床家・研究者の、日常的な学術的活動のドキュメンタリーに近い。

一般書であるため、産科臨床の現場や研究活動に従事する医療専門家にとっては、専門領域の内容は必ずしも最先端の情報とは感じないだろう。しかし、「産む・産まない・産めない」に関連する諸問題の論点を整理するために、非常に有益な本である。

つまり、この本の内容は、私たちが、それぞれの専門分野で向き合うケア対象者に、情報伝達の努力を惜しまなかった内容なのである。しかし、これまで私たちは、私たちのケア対象者ではない一般の人々には、それを伝える努力をあまりしていなかった。この本は、それを試みたものであり、私たちにその重要性を気づかせてくれる本である。

あとがきによれば、この本の執筆グループは、日本学術振興会「人文・社会科学振興プロジェクト

女性の視点から リプロダクションを考える



松岡悦子 編

定価 756 円 (本体 720 円 + 税)
新書版 / 講談社現代新書 / 2007 年

ト研究事業」のなかの「豊かな人間性の獲得」に相当する、異分野のメンバーからなる「文化とリプロダクション研究会」である。このグループは、ほぼ同数の助産師や医師などの医療専門職と、歴史学、社会学、文化人類学、ジェンダー、科学史を専門とする人文科学系の研究者で構成され、リプロダクションを複数の視点から検討しているという。

本の構成は、「産む・産まない・産めない」に関連する複数のテーマによる 10 章と 4 つのコラムからなる。どの章も、執筆者は、ケアの受け手である女性の立場や感性を、淡々と理性的に、具体的な事例や場面を交えながら、読者に語りかける。あたかも読者は、各執筆者から健康相談を受けるクライアントになった気分になる。

この本は、リプロダクティブヘルス／ライツの概念を、一般常識として定着させるために有益な本である。したがって、まだ、妊娠や結婚が現実的な問題と認識していない高校生や大学生、社会人、そして産科学・母性看護学・助産学の専門教育を受講する前の医療系大学の学生に、一読を薦めたい。さらに、少子化問題を論じる政治家や行政担当者はもちろん、少子化および産科関連の取材を行なう予定のマスコミ関係者にも、自身が向き合う課題の論点を整理し、仕事に取りかかる前の基礎知識を確認するために、ぜひお読みいただきたいと思う 1 冊である。